

薬薬連携～外来がん化学療法連絡会～ 取り組みと成果

尾久店
○大友雅子

【はじめに】

抗がん剤の処方箋を持った患者様が来たら、どう対応しますか。

「詳しくは医師にお聞きください・・・」

処方箋から得られる情報だけでは、服薬サポートに限界があります。

がん化学療法の外来シフトが進み、経口抗がん剤が保険薬局で調剤される頻度が高くなってきています。また経口抗がん剤が処方されていなくとも、支持療法（病気そのものに伴う症状や、治療による副作用を、防止・軽減させる治療）として制吐薬のみの処方箋や、皮膚症状に対して保湿剤やステロイド剤のみの処方箋を受け取った際に、処方箋を見ただけでは、その人が、がんの薬物療法を受けているかどうか薬局ではなかなか判断できません。

薬局で働く私たちが、病院薬剤師と連携して、患者の情報を共有しながら、的確な指導や対応ができる仕組みを作る必要性を感じます。

こうして、外来がん化学療法連絡会が、今年3月よりスタートしました。

【方法】

- ① 2か月に1度の間隔で連絡会を実施（対象は荒川区の調剤薬局）
- ② 連絡会実施月の前月に東京女子医科大学東医療センター薬剤部と打ち合わせし、連絡会のテーマや役割を決定
- ③ 連絡会開催のお知らせチラシを、荒川区薬剤師会をはじめ、近隣薬局に配布し、参加人数を取りまとめる
- ④ 連絡会終了後に薬剤部が作成した議事録を荒川区薬剤師会・近隣薬局に通知
- ⑤ 薬局内で、参加できなかった人も誰でも共通認識できるよう資料配布

【結果と考察】

第1回（3月）外来ケアルーム見学、外科医師・病院薬剤師を交えての質問会

第2回（5月）「がん化学療法で使われる言葉」について

第3回（7月）「XELOX療法」について

第4回（9月）「がん化学療法の有害作用～嘔気・嘔吐～」について

4回の連絡会を終え、東京女子医科大学東医療センター周辺の調剤薬局だけでなく、荒川区薬剤師会会員の薬局を含め、現在17の調剤薬局が参加し、情報共有できる場となっております。病院薬剤師や他店の薬局薬剤師間で、互いに顔が分かる関係になってきたことが、なによりの収穫です。

今後の薬薬連携連絡会の予定する内容は、がん化学療法だけに限らず他の疾患にも領域を広げていき、薬局が普段問題としている患者対応等も、病院薬剤師を含めて現状把握しながら改善していく場としても活用し、様々な面で情報共有していく予定です。

薬薬連携をより一層強化していきたいと考えます。